謌文稿

服部文庫
イ 17
2245

117 特
2245

記天智帝誅入鹿事

神武帝奠都於橿原以來皇統一系寶祚無窮天皇則
統御天下萬姓臣下則輔政教於是乎帝道備天下寧未
嘗有姿推者也矣當皇極帝之時有蘇我蝦夷者其子
曰入鹿矯姿過父威福隨意造營第宅僭擬宮城而抱不
軌之意中大兄皇子早察之潛謀誅除而未果皇子與中
臣鎌足親善乃託俱學於南淵氏而密議車中又引蘇我
倉山田石川麻呂佐伯子丸葛城網田以為援會三韓入貢皇
子欲乘其時而舉事及期天皇御大極殿入鹿入侍皇子
執長槍隱殿側鎌足持弓矢從衛使子丸網田匿劍放

117 5369

貢櫝中而進石川磨前読表將終子九等畏而不発石川
磨手戦声震入鹿怪問故誇對曰天威咫尺不辨乃爾中
大兄皇子恐失機直入斬入鹿肩次子九進斬其脚入鹿乞
哀於帝中皇子進奏曰入鹿陰欲滅王室謀不軌大逆無
道矣臣等今謹為國家誅逆臣帝起入内統令巨勢德
大古將兵誅其父蝦夷々自殺矣入鹿為人臣矯奮專
横竊欲軌不軌滅王室衆不安天地使彼一得志則王室之
安危亦不可測焉可謂大逆無道矣皇子早案之除國賊
而振禍於未萌且使後世知大義之不可犯焉嗚呼其功偉
而其行業大矣後紹大統称中興之祖固宜矣

送友人学成而歸故郷序

丈夫一辞故郷負笈於千里之外業若不成至死不帰矣若其
半途而帰猶臨陣見敵而走之其丈夫之所深愧也何兄辞郷
奬余來也實在甲戌之春而六年於茲矣夙夜労心焦思孜々
而勉未嘗休息矣今也業成而將帰茲開訣別之宴同學
之士相會而以賀焉羨賞之語怨訣之頌堆積成山亦足以兄
之德矣嗚呼若兄者真可謂負為丈丈矣全既俱來栄
成故獨當留兄其知吾心之恨耶兄帰日御人若問余則答
曰尋當衣繡而帰

谷中殻傳

谷中穀名穀四郎号吶哉穀其字也為人慷慨正直尤好國詩
蓋一狂夫也丙子之秋寓某塾囊無一錢衣服之醜美都付
度外常読古今之歴史每至乱臣賊子之談眦目張声呼曰
吶哉某々矣暇日則曳大杖穿草履登高丘倚木抱膝高
吟朗誦傍若無人興不尽至於夜不帰矣有車夫勸乘車穀
励声叱曰吶哉我有足健則歩労則息何必須車乎嘗遊
於尾張街有外人説耶蘇教者穀傾耳聽良久矣暫為直
入講堂罵曰吶哉蒼眼奴何為説異端而迷惑我同胞乎
外人以為醉者俾篤諭而去穀益怒攘臂尖口極辨駁為
警吏拘引抵屯署穀伏階下無涙慟恨曰生蚤微哉亦皇國
之一民也閔茂我　天子罵我皇國之説豈忍默乎吶哉
去髯奴矣嚙齒摩足而不起吏免而放之乃雙手擦両眼
而出見者以為大狂矣每花時借一瓢於人盈以水握虧盃箕
坐於花下斟為曰酒蚤自酒成於水看蚤嘉常呼吸之飲水
猶尚優於食酒者矣每見乘車人歎曰吶哉人噫彼無足乎
豈其無足矣晩著忠肝溢論十篇痛論當時之風多足
観者矣後数年去塾終不知所往

猿説

信陽之山有猿猴常棲高梢樵夫往其傍而斫樹木猿猴
観焉而效之以為得其術矣樵夫欲捕之而未能一日竊盗樵

夫之斧上樹而弄爲樵夫於是至其下以他斧爲打己頭猿猴亦以斧擊己頭々毀赤血淋離與斧落地而死矣嗚呼今之捨自己之事而叨習他人之風者未嘗爲樵夫不被謀恐夫

題競馬圖

競馬圖一幅係某國手所筆畫圖精密筆力如神有胯驥而後者有策駑馬而勝者千態万狀觀者殆汗手矣學者之事亦類焉矣富者不必進貧者不必退後者或前前者或後俚語曰臨池者猶險路行車急即反矣嗚呼進退匪測豈一競馬乎辛巳孟春某題

耐忍說

所以人之拳声名於天下者非偶然也若一朝之怒亡其身者柳匹夫之事耳亦何論矣蓋自古英雄豪傑成大業事名者未嘗有無耐於可耐忍於可忍之能也矣不見彼韓臣乎出胯而舉大名不見彼張良乎捧履以爲帝者師此二人者非得声名而後始忍者也不云彼五出手浸嚴寒而始開馥郁兮美花甚以稱清潔君子矣不云彼虬枝乎受風雪而尚逞後凋之色故爲樹中大夫矣此兩者非被賞而後能耐寒雪者也論者或以是歸天者謬矣余故曰耐忍者成大業之

源舉鴻名之基也矣

觀梅記

皇城之東二里許称亀戸有梅園古木森々老幹成林曲者如蓋卧者如龍是以有卧龍梅之名矣一日得閑行而観焉滿園布白色恰似蛟龍得雲異香馥郁氷神醒星乃舉鄙酒與二三子相酬哦詩咏謌幽賞一日足以忘世事而樂矣既還猶髣髴若見恍惚若薫數日不能忘由作之記

舟中納涼

白波のあつまりいとはるかに小舟の四人五人乘つつまを知して墨田川を見渡せば多くうるやうくこそ出して或は河ふさののうら或は河ふかの流れをとしてあるかるかの面のすさまじき靜ふかせくるをとゝもむ方おくらしかりまた人〻酒をとゝのへて古琴うるをとを者〻なるこの音ふかあるとまたの二声三声をあらしてこの世ハいとおもしろきもあるなるしの

舟の棹のやをとまろこひあひて岸よりすぐる八重ふ
月のそらのねふちん

墨田川よあそふ

買の上の一むらの雲さくあるて雪山と時やうちり花ハ
公のうつくしき友うきて五人六人もよ隅田川ふなの舟を
うつの人多くるやうく上り潮よこそ生くるかとふ川波
いとあつみ水鳥ものめの妻ふさまをいをたをり名ち
夏ハ寺とうふひ名むかをさこをの寺も思ひ出てらすか
堤のかをりよこをうをくるに花ハいと美る咲ふ月ひて
雲とのうをを春ーまる計をうるうぶうくよ楊花
煙燈とふひといるふくるよのくる枝をを立てまきき
舟もてをて花のでよやはらひて酒をを多くつ

僕うらやましくあやしみ声をうちひきそろへて大こゑにて
打ずしてあるにたゞ白髪の醉人のみなりあすかの雪とたゞ
すつて角れ者るゝいとおもしろきやうなる美しきかたち
のたちやかなる衣きて人もすけよ舞ひ抱ふなる花と華
を中讓るとやゝ云つゝ宿うして散るまでハたゞと云あつ
かるまかうくと水るひゝく鐘の声は驚きてあハ年し
う毎る移うこゝ出もむとしるなり或人
芝ふたち毎を泛て偶ハ人きこのねを花と暮し
つとあり乱ハうらやまし一うかゞうて或人
生こゝ月出人こゝるを泛うて河つる流ふ花を見る

のふとそうるひ出なる月もや、暮てを乱ハをちこちの
ちゝ犬のひうゝ吠るう花よううひたるゝ手ちを画ち
うま角くちえ人し醉ひうれて井すす寄ひのくう
を山者のこたふるもいとをうしちうてすくてを
ちる折まくて云のおとハ地狀の月のまつる見るこちう
して忘れのたくまうれハくういしるして知らう対
の見ひもとち

壽松述懷　去壽

なく山の真木の古樹て素色なる松葉（おさく
千草の花の風吹けばちりぬくるを松ばかりしとは不栄え
て素色と色もうつらぬ風ふけとちる花もちく物色
もちれてゆるゆるちる枝のうつらぬことと古の色の移
ろはぬこと村肝のかつてて手力のをよくむうるう國
の為つとめてまーしの為つくしてまーしとき八うきた
諏訪の湖ふ毎拾ーなる時まわる
真父湖ふ小舟浮べて風のむ多こまを仏わく水の
あとも為つくくよる　波の吉しまわうよ青山四方ふて

八百万甲斐うねゝ水まうつて波の穂ふらけろふる雨
孔水底うゝ無ゝ拙ひぬ白妙の雪ふるねと立てる木
のうゝゝあるねと夏のあつさも忘れぬ世の中の
うゝし知れて自うゝ多のゝうゝ毎の拙ひゝ

折まふれて

日の本の倭の國の人艸の一人となりて大君の深き恵の
ふみはぢふもちゝくきまひて幸あれ生涯ゝ安ゝあれと
まもるゝ学問の道を世の人まうまう国のゝ
ふつつき功績ゝ一つ多に立てはまうあれゝ
時代のゝ年ゝ多ゝ孔て拙ゝむ折ゝ拙ひつゝ無れむ

世ゝこをゝゝ考へをゝゝふゝくあるゝゝ
つゝめさゝふめやゝうゝ勵まゝゝめやこれの吾身ゝ

和歌の大人の法墓まうて

東京の西ゝ和歌の大人の法墓ゝ有てゝ
ゝゝ吾ゝ吾ゝ拙ゝ拙ゝ拙ゝ功績を多ゝ
ゝゝふ来りてこれゝ手の美ゝそをうつまく百草は
あゝまゝ生てゝ多ゝゝを語ゝ多ゝ来ゝまうつゝ
人ゝあゝゝてゝゝ色の声のゝまれゝまゝふゝとゝ思ゝ
われゝゝゝまうふ袖拙ゝゝゝ大人の法墓ゝ

上のゝ國ゝて外國人とゝ多ゝまう集ひを那蘇

のときことゝくるを出てある

十四日に八橋の驛に紅の赤くせもひ多うむらけ二つの音
ハふるこゝろ青くひらてゝ丈多あき外國人の都なる上
野の國より集ひつとまことなるゝと堅なる書てふ物を
多ふとけよいなくき接ケ手ことをまことくゝ
あき事をまうとう多ひん得ぬやまと佛をゝのをち
こちをはうなくゆうう見もやぶぬを事記をつるなく
い論ひつゝ玉ちふふ詩をうろめあるつ神君をふこ
して多わ事をこゝ多くゝいつハ其人の暴ゝ名ぶし
其國の表さまをゝくれて百多ふ仏千のをゝハ云ゝ

得ハをつけをゝ下ハをうゝうう

立春

ふるさとの雪げの中のいろさえてのとけき春のうぐひす

吹風やとしの暮をひくまくらもむ春とまつ春をうぐひす

[illegible]

初春

あらたまの春のふるゝはきのふをば将来ぬるよとまつそとぶ

梅

うぐひすの初ねうぐひす梅の花きのふ笑まをうつて

山家梅

うぐひすの花をまつ山里は梅を笑ひて春ひらく

梅

わの家の梅咲まうくひまを求るあとハ庵ま本をむ

鶯

植置一えハ春ゝ鶯ハ梅の枝ま射ふ〳〵鳴く

櫻

ま治の移り行く春ゝ似ぬものハ色香をの〳〵櫻ちゝ

春雨

ふるとゝ心ゝ見ぬ夕の春雨ハ木ゝのことゝそ色まゝる

杜若

春ゝのへ為てをゝるうきつはゝ沼ゝ水ふゝそ香ひる

瓦斯燈

ひゝゝゝ春の〳〵燈ふゝまゝふやゝの光ゝのもゝ大の新

首夏

ゝゝゝゝそ夏ハ来るゝきのふまてゝゝゝ春と立のゝれて

春ゝ立ゝ〳〵ハ春ゝ立ゝ〳〵ハ春の元をまとふ我ゝ

新樹

ゝふをひて庵の見ゝ春の茂て身ゝをゝ〳〵ゝゝる武

卯花

うゝ花のさきゝ春ゝの山ゝハ春ゝ雪ゝ立さとゝ〳〵る

郭公

あるつゆ雨雫垣の花の玉垣ぬれ露

早苗

青田の時雨まさりて苗つのやさきなびく

牡丹

花ぶなの色ふかさこそ枝さきこぼれて紅ふかきのをか

青田

いつ時化人雲をぬけぬ軒ばの草ひまもなく雨のさこそ

白百

風もなく雨つゝ苦しとあふぐ百日ゆ夕立のそら

浦夕立

夏人のなまもなきあつつの百日ゆ夕立の

麻

雨ふりて夕ぐれ雨ふりぬさをしかの百のうりは妻やこふらん

蓮

夏草の一つ二つのかるもの手草の露ぬれそぼつる

夏草

池の面よりすゝ新の移り来てこのやまもとしさる物用

秋田

備風ふきまくるのをねぶりかぶりぬ

蛍

罰のくはまき花ぬとも見てもあくまでかさやかさ海の彩の系

持衣

冬とて草も暖るさよ年よりあるやまれ衣うつし

冬梅

雪風よ妻の庭とつるつる枝るもしれる梅ちるひぬ

庵上初春

九重のこのきをあくてちく鶴の千代万代と祝ふなること

鶴さそふ花重よ列て極ふ代君の恵の廣き法ぶ千ふ

東京府師範學校